

「2016 年度 第 1 回<児童>における「総合人間学の試み」研究会」報告 テーマ：「児童学科の教育課程と「基礎実習」（その 2） -アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善の模索-」



会場内の様子

今回の研究会は、前年度 2 月に開催された同研究会第 3 回研究会の中での相川徳孝教授、市村和子客員教授、齋藤範雄客員教授らによる発題を引き継ぐ形の研究会となった。

主な検討テーマは、1. 基礎実習における「観察」、2. 基礎実習における「記録」、3. 観察実習を経た学生の学習成果と課題であった。

今回の研究会の冒頭では次のような問題が確認された。2015 年より、「基礎実習」（2 年次・通年・2 単位・指導必修）の位置づけが幼稚園教育実習の一部という枠組みから外れ自由度が増した一方で、今後これを児童学科の教育課程にどのような形で位置付けるべきか試行錯誤の状態にある。「基礎実習」は 2 年次に進んだ児童学科の学生が最初に経験する観察実習であり、子どもの姿を観察し、記録にまとめるという実習である。しかし、今般の学生の学びの実態には多くの問題がある。「基礎実習」は、学生たちに児童学の学びを開く根幹をなす学びであるがゆえに「基礎実習」をよりよいものとするべく、よきはよき、改善すべきは改善すべきと、忌憚のない意見交換を通じて 2016 年度の基礎実習に結びつけたいという課題が共有された。

研究会では、次のような意見が提出された。

- ・現在、基礎実習は聖学院小学校で小学生を観察

する形で行われているが、小学生と幼児では発達の姿にかなり違いがある。小学校免許希望の学生は小学校での観察実習でよいかもしれないが、逆に、特に保育士を志望している学生が最初に行く実習として、小学校にしか行かないというのは基本的に違和感がある。小学校での観察は基本的に授業観察であり、遊びの時間はあるが少ない、という現場での観察ということになる。やはり、学生たちの将来の希望に沿って、小学校にも行くし、幼稚園にも行くというのがリーズナブルであろうし、資格は必要ないという者もみんなそこへ行って最初に実習をやりますよというのが自然でよいのではないか。

- ・1 年次の学修しか経ていない段階で、学生たちの力で子どもの何を観て、何を研究の課題とすればよいのかを見出し、記録することを課すというのは酷なのではないか。
- ・児童学で人を観察できるかどうかというのは、「他者を客体として捉えることができるか、また、これを実習につなげるのであれば、それを言語化できるかどうか」ということである。だとすれば、2 年生の「基礎実習」では、子どもの姿を客観的に観察し、これを記録として言語化する能力を養うことを学びの目的にしていけばよいのではないか。等々。

これらの研究会での討論を経て、2015 年度は「事前学習（講義）⇒聖学院小学校での 2 日間の観察実習（3 コマ×2 日分）⇒観察記録の提出⇒事後指導」としていた教育内容を、2016 年度は事後指導の後、「将来、幼稚園教諭・保育士を希望する者は、聖学院幼稚園での観察実習の実施/将来、小学校教諭を希望する者は、聖学院小学校での観察実習の実施/ゼロ免の学生は学生の希望するいずれかの場での観察実習」を加えることとした。学生たちが、2 日間の観察実習後、担当教員の事後指導を受け、それを踏まえて整理された問題意識をもって再び観察に臨み、それを報告としてまとめて提

出するという方法をとることで、学生たちの学外実習の基盤として必要な力を高めることを狙いとすることが申し合わされた。

今回の「基礎実習」の改善を通じて、「基礎実習」が学生たちに児童学への新たな関心と呼び覚ます好機となることを学科は願っている。

[2016年4月1日（金）15時~17時 聖学院大学2号館3階2306教室]

（文責：小池 茂子〔こいけ・しげこ〕聖学院大学人間福祉学部児童学科教授）